

1. 種の解説

体長 18~28 mm。黒色でやや光沢があり、体下面は腹部をのぞき橙褐色の毛を密生する。体は長円形で腹背に強く肥厚し、頭部は大きく扇形に広がり、オスは中央に後方に湾曲した1本の長角を具え、メスでは中央が隆まり横弧状の隆起線を有しその両端に小突起を具える。前胸背板にはオスでは広く二叉に分かれた強大な突起を有しその両側にも小突起を具え、メスは中央前方に明瞭な横弧状隆起線が認められる。

成虫は5~10月に出現、放牧場の新鮮な牛馬などの糞に集まる。夜間よく灯火に飛来する。

2. 分布

国外では済州島、朝鮮半島、中国、ロシアに、国内では北海道、本州、佐渡島、伊豆大島、三宅島、式根島、九州、壱岐、五島列島、口永良部島、屋久島に分布する。県内では富士宮市朝霧高原の古い記録があり、1980年代後半の同所での採集例がある(未発表)。

3. 生息環境

山地・高原の放牧地に生息する。また、シカ糞に依存し、林内に生息する個体群が存在するようである。

4. 生息状況

県内からは富士宮市朝霧高原における記録と未発表の採集例があり、近年の情報として朝霧高原産の標本が存在するが、詳細な生息状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

放牧地及びその周辺の環境が著しく悪化したとは考えられないにもかかわらず、一部地域をのぞき全国的に個体数が減少している。飼料への添加物や寄生虫駆除薬などの投与により、糞の質が変化した(71)ためではないかと考えられている。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

インターネット上のオークションでは「静岡県産 2016年採集品」という本種の出品があった。

8. 主な文献

川井信矢・堀 繁久・河原正和・稲垣政志(2005) 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群. 六本脚, 東京, 189 pp.

田村正人(1962) 富士農場およびその付近の昆虫目録. 東京農業大学短期大学農業科・東京農業大学日本植物園研究所, 31 pp.

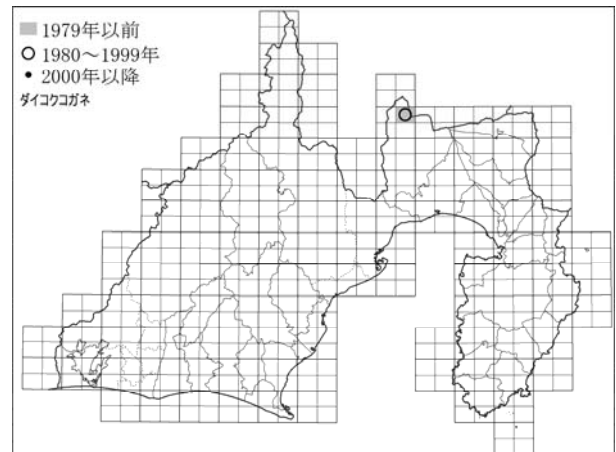
9. 標本

富士宮市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(多比良嘉晃)



富士宮市産 2013年9月6日 水田啓之採集



オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* Lewis, 1887

コガネムシ科 Scarabaeidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

体長 22~32 mm。黒褐色で多少とも緑銅~紫銅色の光沢を帯び、翅鞘はしばしば赤褐色を呈する。頭部は小さく両側は板状に隆起し、前胸背板中央に 2 縦隆起条を具え、オスでは稜状に発達、翅鞘背面はほぼ平坦。

成虫は 7~8 月頃出現し、大木の樹洞の内外に見られ、幼虫も樹洞内の腐植質中に生活する。成虫は特有の強い芳香を有する。

2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では静岡市葵区田代大井川上流域、静岡市岩崎県民の森、榛原郡川根本町蕎麦粒山、浜松市天竜区水窪町麻布山・山住山で記録があり、他に富士山、静岡市葵区田代東俣で採集例がある (未発表)。

3. 生息環境

大木が存在する自然度の高い森林に生息する。幼虫はミズナラ、カエデ類、スギなどの大木の樹洞内の腐植質に発生するので、それらの大木が存在する環境が必要不可欠である。

4. 生息状況

県内の山地森林に広く生息していると考えられるが、詳細な生息状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

過去の森林伐採 (11)、ダム建設 (25)、林道の敷設 (24) などによって一部の生息環境が失われた。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

林道上に落ちている個体を拾うことがある。

8. 主な文献

原木直美 (1981) 蕎麦粒山のオオチャイロハナムグリ. 駿河の昆虫, (115): 3399

平井克男 (2017) オオチャイロハナムグリの 大井川上流域の記録. 駿河の昆虫, (258): 7078

乙部 宏・城殿 浩 (2000) 静岡県西部の甲虫類の記録若干. 駿河の昆虫, (189): 5310

坪井俊久 (1979) 水窪町山住山の甲虫 2 題. 駿河の昆虫, (104): 3092

渡辺一雄 (1984) 県民の森の昆虫相. 遠州の自然, (7): 3-28

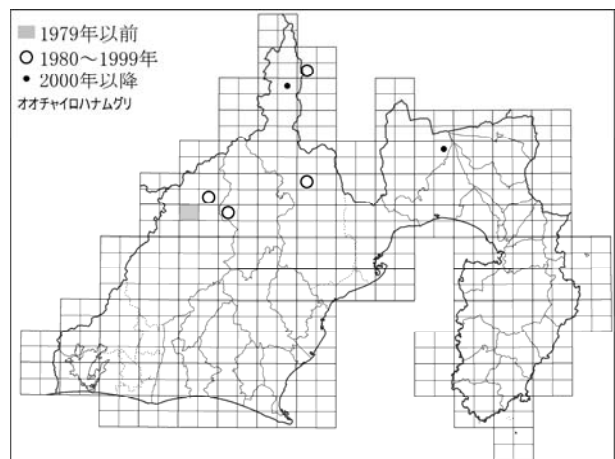
9. 標本

静岡市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 Y.Tahira

静岡市葵区産 1980年8月10日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

1. 種の解説

体長 2.7~3.2 mm。暗灰茶褐色で光沢はやや鈍く、肢の跗節などは黄褐色、背面は黄褐色毛をやや密生する。体は細長く、翅鞘は両側おおむね平行、頭部は前胸背板前縁とほぼ同幅、両側の複眼は大きく丸く突出し、触角は短く頭幅とほぼ等長、前胸背板は背面に 3 凹陷と両側にくびれがあり、翅鞘は前胸背板より少し幅広い。

成虫は夜間に生息地付近の灯火に飛来することがある。

2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では Tahara-mura (旧磐田郡田原村、現磐田市及び袋井市) (副基準標本) と浜松市浜北区於呂の記録がある。

3. 生息環境

比較的大きな河川の中・下流域に生息し、水中に沈んだ流木や竹に付着しているといわれる。

4. 生息状況

県内では 2 例の記録しかなく、詳細な生息状況は不明である。浜北市では付近を流れる天竜川に生息していると考えられる。

5. 減少の主要因と脅威

周囲からの農薬・肥料や生活排水などの流入による水質悪化 (31、32)、河川改修や護岸整備 (13) の影響で生息環境が減少するおそれがある。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

本種によく似たミヤモトアシナガミゾドロムシ *Stenelmis miyamotoi* Nomura & Nakane, 1958 は本種の同物異名とされた。

8. 主な文献

Hayashi, M. & H. Yoshitomi (2014) Taxonomic treatments of two Japanese elmid beetles, *Stenelmis vulgaris* Nomura and *Leptelmis gracilis* Sharp (Coleoptera: Elmidae), with descriptions of their larvae. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 20: 235-244

加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘 (2008) 第 5 章 1 項 6 佐鳴湖周辺の昆虫相. 静岡県戦略課題研究 「快適空間『佐鳴湖』の創造」 研究報告書, pp. 470-523. 静岡県産業部振興局研究調整室, 静岡.

Nomura, S. (1958) Drei neue *Stenelmis*-Arten aus Japan. (Coleoptera, Elmidae). *The entomological review of Japan*, 9: 42-45

9. 標本

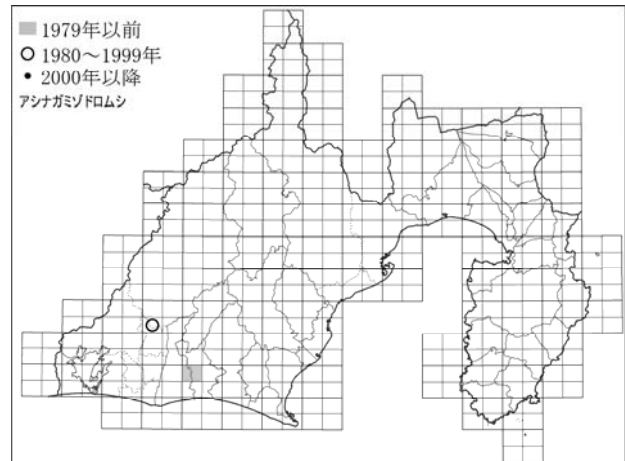
浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 T.Kato

浜松市浜北区産 1999年6月16日 加藤 徹採集



アオバヒメコメツキモドキ *Anadastus praetermissus* (Janson, 1873)

コメツキモドキ科 Languriidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 4.3~5.7 mm。橙黄色で複眼及び基部 3~4 節をのぞく触角は黒色、小楯板及び翅鞘は藍青色、頭部背面後方、基部をのぞく腹部腹面 (時に腹部全体)、肢の附節などは多少とも暗色を帯びる。体は細長く両側はおおむね平行、触角は 11 節からなり末端 3 節は広がって球桿を形成、前胸背板は長幅ほぼ等しく、中央前で最大幅となり、基部に向かってやや狭まる。

コメツキモドキ科の種はいずれも植食性で、幼虫は多くは生きた植物の茎中に食入するが、本種の生態に関してはほとんど判明していない。

2. 分布

国外では比較的最近に韓国から記録され、国内では本州に分布し、福島県、神奈川県、長野県、岐阜県、三重県、兵庫県 (基準産地) などで記録がある。県内では御殿場市印野、裾野市須山、富士宮市根原で採集例がある (未発表)。

3. 生息環境

草原的環境に生息する。

4. 生息状況

県内では富士山周辺と愛鷹山周辺の草原的環境において採集されているが、詳細な生息状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

草原の植生遷移の進行 (54) や開発 (23) などによって、生息環境が縮小・消滅するおそれがある。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

三重県鈴鹿市では湯水した池の中に生えたイネ科植物のスイーピングによって採集されたという。

8. 主な文献

Boo, H. J. & H. Park (2014) Taxonomy of Languriinae Crotch (Coleoptera: Cucujoidea: Erotylidae) in Korea. *Korean Journal of Applied Entomology*, 53(4): 441-448

平野幸彦・荻部治紀・高桑正敏・田尾美野留 (1995) 甲虫類. 神奈川県レッドデータ生物調査団 編, 神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学) 第 7 号 - 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 -, pp. 212-254. 神奈川県植物誌調査会, 小田原.

生川展行・市橋 甫・横関秀行・天春明吉・稲垣政志・前川和則・村木武則・官能健次・市川 太・久保田耕平・稲垣順子 (2008) 第 7 節 鈴鹿市のコウチュウ目. 鈴鹿市の自然-鈴鹿市自然環境調査報告書-, pp. 525-691. 鈴鹿市.

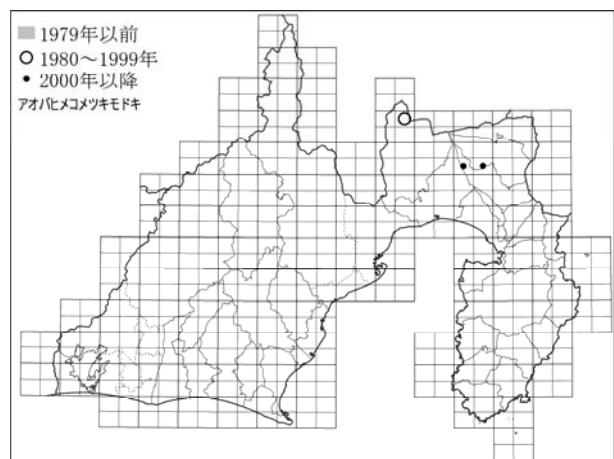
9. 標本

富士宮市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira
富士宮市根原産 1995年7月9日 多比良嘉晃採集



ナカイケミヒメテントウ

Scymnus (Neoplus) nakaikemensis Sasaji & Kishimoto, 1996

テントウムシ科 Coccinellidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 1.7~2.0 mm。体はおおむね半長球形、橙黄色で、前胸背板基部中央の小紋及び翅鞘基半中央の逆三角形紋と腹面の後胸腹板は黒色。体表は白色の軟微毛を密に装い、翅鞘では縦に少し波曲して配列される。

2. 分布

日本固有種で、本州に分布する。栃木県、群馬県、茨城県、埼玉県、神奈川県、福井県（基準産地）から記録があり、県内では富士市浮島ヶ原の採集例がある（未発表）。

3. 生息環境

自然度の高い湿原のヨシに生息している。ヨシに特異的に寄生するアブラムシ類などを捕食しているものと考えられるが、生態はわかっていない。

4. 生息状況

県内の採集例が1例だけで、詳細な生息状況は不明である。富士市浮島ヶ原では、ヨシ原のヨシをスウィーピングして採集されたが、その後の数回の調査では追加個体はえられず、個体数はきわめて少ないものと判断される。

5. 減少の主要因と脅威

富士市浮島ヶ原では、湿地が埋め立てられて畑や水田、工業用地などに改変されており（15-1）、本種の生息環境であるヨシ原が消滅しつつある。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

浮島ヶ原の一角に「浮島ヶ原自然公園」が整備され、きわめて小規模であるが、ヨシ原が保全されている。

8. 主な文献

大桃定洋・高橋敬一・西山 明（2011）霞ヶ浦湖畔に残ったヨシ原：稲敷市浮島の甲虫類。茨城県自然博物館研究報告，（14）：75-92

亀澤 洋（2010）埼玉県東部からナカイケミヒメテントウを記録。寄せ蛾記，（140）：19

佐々治寛之・岸本 修（1996）福井県敦賀市中池見湿地の昆虫相とその自然環境保全の提言。付テントウムシ科昆虫新種記載と生活史。福井大学積雪研究室紀要「日本海地域の自然と環境」，（3）：15-36

佐々治寛之・大川秀雄（1998）ナカイケミヒメテントウが栃木県渡良瀬遊水池に分布。月刊むし，（330）：38

松原 豊（1999）神奈川県未記録のナカイケミヒメテントウとツガヒメテントウの採集例。神奈川虫報，（127）：48-49

9. 標本

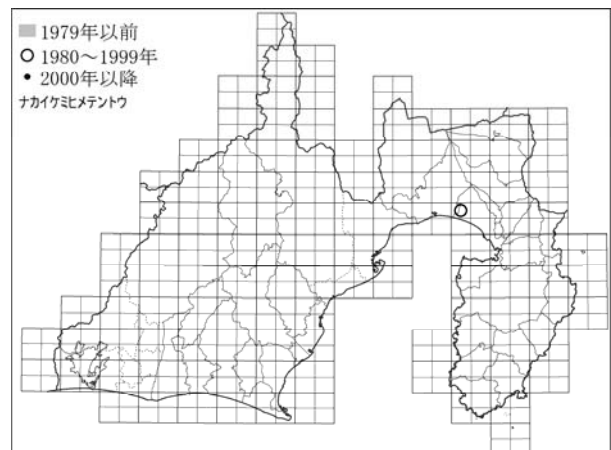
富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（多比良嘉晃）



©2019 Y.Tahira

富士市柏原産 1999年5月3日 多比良嘉晃採集



ケブカマルクビカミキリ *Atimia okayamensis* Hayashi, 1972

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 5.5~8.5 mm。黒色で光沢を有し、体表は灰黄色の微毛を密生、翅鞘では 10~20 程度の無毛の小円紋を多少とも不規則に散布し、しばしば縦に連絡することがある。

成虫は 3 月下旬~5 月頃と 9 月下旬~11 月上旬に平地から低山地に出現し、ネズミサシの生木に見られる。幼虫もネズミサシの衰弱木や枯れ木を食害する。

2. 分布

日本固有種で、関東地方以西の本州に分布する。県内では浜松市浜北区静岡県立森林公園で 2 例の記録がある。

3. 生息環境

ネズミサシが自生するやせた丘陵地や低山地に生息する。

4. 生息状況

浜松市浜北区の静岡県立森林公園では、個体数は少ないながら、近年も生息が確認されている。

5. 減少の主要因と脅威

静岡県立森林公園では、陰樹の成長に伴って林内が暗い環境になると陽樹であるネズミサシが衰退するおそれがある (54)。本種は全発育段階においてネズミサシに依存しているので、この植物の消滅は直ちに種の存続に関わってくる。

6. 保護対策

浜松市浜北区の生息地は自然公園として管理されている。

7. 特記事項

湖西連峰の愛知県側や富士山の山梨県側で採集記録があり、これらの地域の静岡県側にも生息している可能性が高いが、未調査である。

8. 主な文献

市川恭治 (1981) ケブカマルクビカミキリを静岡県内で採集. 月刊むし, (128): 31

市川恭治・奥田宜生・草間慶一 (1988) 静岡県のカミキリムシ. 静岡の甲虫, 6(2): 3-81

大木 裕 (2007) ケブカマルクビカミキリの河口湖町における記録について. 甲虫ニュース, (157): 20

白井勝巳 (1980) 愛知県豊橋市でケブカマルクビカミキリを採集. 月刊むし, (113): 39

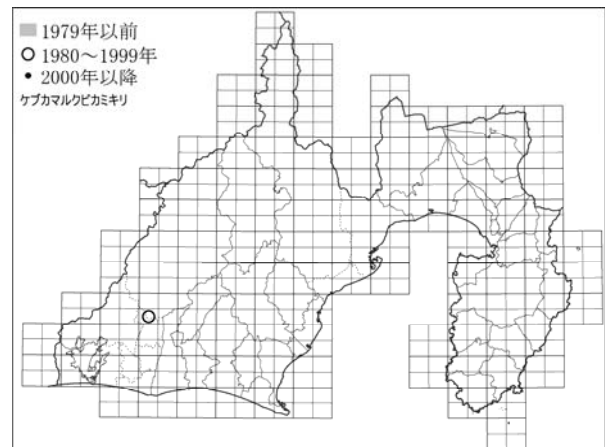
9. 標本

浜松市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 Y.Tahira

浜松市浜北区産 1981年4月12日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

ミドリヒメスギカミキリ

Palaeocallidium (Palaeocallidium) kuratai Yokoyama, 1972

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 8.5~13.0 mm。暗褐色で背面は緑色の金属光沢を帯び、肢は多少とも明色、体はやや細長く腹背にかなり扁平、翅鞘の厚さが薄いので少し脆弱な感がある。

成虫は 7~8 月頃に亜高山帯下部の針葉樹林に現れ、太く樹皮の厚い天然カラマツ生木の樹幹や伐採木上に見られる。幼虫もカラマツの樹皮を食害する。

2. 分布

日本固有種で、本州中部（栃木県、群馬県、長野県、山梨県、静岡県）にのみ分布する。県内では静岡市葵区田代の二軒小屋（基準産地）周辺、東俣、広河原などで複数の記録がある。

3. 生息環境

亜高山帯のカラマツの大木が生育する原生的な針葉樹林に生息する。

4. 生息状況

かつては二軒小屋周辺の貯木場や大井川上流東俣のカラマツ大木の樹幹などに相当数が見られたが、近年の記録はなく、現在の生息状況は不明である。

5. 減少の主要因と脅威

生息地の大井川上流部では、過去の広域伐採（11）に伴う森林の乾燥化などの環境の変化によって、本種を含む種々の昆虫が減少しているようである。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

最近、富士山の山梨県側から複数個体が記録され、静岡県側にも生息している可能性がある。

8. 主な文献

足立一夫（1974）1974年南アルプスカミキリ採り或る記．北九州の昆虫，20(3)：85-92

市川恭治・奥田宜生・草間慶一（1988）静岡県のカミキリムシ．静岡の甲虫，6(2)：3-81

久保田雅久・日下部良康・苅部治紀（2016）富士山でのミドリヒメスギカミキリの記録．月刊むし，(550)：19-20

草間慶一（1975）大井川上流域のカミキリ．静岡県自然保護協会 編，南アルプス・奥大井地域学術調査報告書，pp. 102-133. 同協会，静岡．

草間慶一・多比良嘉晃（1979）大井川上流域のカミキリ 第2報．東海自然史，(3)：62-71

Yokoyama, H. (1972) A new species of genus *Palaeocallidium* from C. Japan (Col., Cerambycidae). *The Entomological Review of Japan*, 24(1/2): 11-13, pl. 4

9. 標本

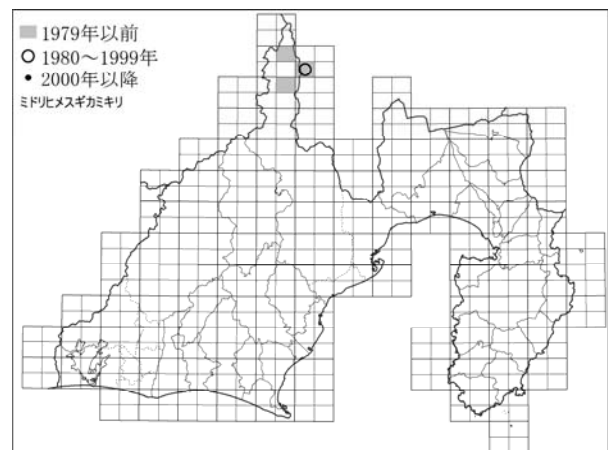
静岡市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（多比良嘉晃）



©2019 Y.Tahira

静岡市葵区産 1980年7月23日 多比良嘉晃採集



ヒメビロウドカミキリ *Acalolepta degener* (Bates, 1873)

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

体長 8.5~12 mm。全体灰赤褐色の微毛で密に覆われてビロウド様を呈し、翅鞘では灰白色微毛による不定形・雲状紋を混じ、第3節以下の各節基半も灰白色微毛を密に装う。触角は細長く、オスは体長の約2.0倍、メスでは約1.3倍。

成虫は5~8月に出現し、オトコヨモギやヨモギの枯葉の中や茎上に見られ、葉脈や茎などを後食する。幼虫もオトコヨモギ生体の茎や根を穿孔・食害する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシアに、国内では本州、四国、九州、対馬に分布する。県内では浜松市浜北区と天竜川下流域の記録があり、駿東郡小山町、富士宮市朝霧高原の採集例がある(未発表)。

3. 生息環境

高原や丘陵地、大河川、時に海岸などのオトコヨモギやヨモギが安定的に群生する草原的環境に生息する。

4. 生息状況

県内では採集例が少ないので、詳細な生息状況は不明である。天竜川下流域では幼虫も確認されている。

5. 減少の主要因と脅威

山野の開発(23)、河川改修工事(13)などによる草原・半草原環境の消失・面積縮小や、侵略的外来植物のシナダレスズメガヤの分布拡大に伴う生息環境の変化(54)などが大きな脅威となる。また、愛好家の間で人気が高いため、コレクターの強い採集圧(41)を受けるおそれがあり、実際にいくつかの産地で相当数が採集されている。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

近年、多摩川流域に生息することが報告されたが、やはり多くの採集者が現地を訪れているようである。

8. 主な文献

長谷川道明(2010)天竜川下流部におけるヒメビロウドカミキリの分布. 豊橋市自然史博物館研究報告, (20): 7-10

市川恭治・奥田宜生・草間慶一(1988)静岡県のカミキリムシ. 静岡の甲虫, 8(2): 3-81

中里俊英(2005)東京都府中市多摩川のヒメビロウドカミキリ. 月刊むし, (413): 45-46

新里達也・武田雅志(2010)多摩川流域におけるヒメビロウドカミキリ個体群の分布と保全. とうきゅう環境浄化財団研究助成成果報告書(一般研究), 31: 1-25

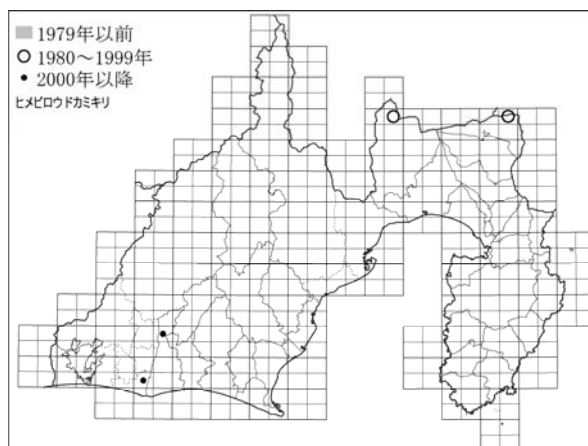
9. 標本

浜松市産: 豊橋市自然史博物館所蔵



©2019 H.Ishikawa

駿東郡小山町産 1986年7月11日 石川 均採集



また、愛好家の間で人気が高いため、コレクターの強い採集圧(41)を受けるおそれがあり、実際にいくつかの産地で相当数が採集されている。

(多比良嘉晃)

1. 種の解説

体長 4.7~7.4 mm。黒色で体表は黄白色微毛を密生し、別に直立長毛を装い、前胸背板正中中部後半と小楯板及び翅鞘会合部は黄白色微毛が特に密生して縦条があるように見える。体はおおむね短円筒形、触角はやや長く雌雄ともに体長を多少とも越え、前胸背板両側には三角形の鋭い小突起を具える。

成虫は6月末~7月末頃に出現、サワグルミの生葉に集まり葉脈あるいは枯枝の樹皮を後食すると言われる。幼虫はサワグルミの枯枝の樹皮内部を穿孔・食害する。

2. 分布

1属1種の日本固有種で、本州、四国に分布する。分布はきわめて局地的で、本県の伊豆半島のほか、群馬県藤原湖付近、山梨県北杜市須玉町、岐阜県高山市(旧上宝村)、石川県白山、奈良県天川村、徳島県木沢村、高知県など数ヶ所の産地が知られているに過ぎない。県内では大井川筋でも未発表の採集例があるという。

3. 生息環境

標高700~1,500 mの山地に生息する。食樹のサワグルミは日本各地の谷筋などにふつうに生えているにもかかわらず、全国的に採集例がきわめて少ないことは説明しがたい。

4. 生息状況

県内では故草間慶一博士が伊豆天城山水生地にて採集された原記載に次ぐ2例目の記録と、伊豆半島における2・3例の記録があるとされ、大井川筋でも採集例があるというが、詳細な生息状況は不明である。伊豆半島天城山周辺は多数の観光客が訪れるようになったものの、比較的良好な森林環境が残されており、現在も本種が生息している可能性はある。

5. 減少の主要因と脅威

道路の敷設(24)や森林の伐採(11)などによる生息環境の変化が脅威となりうる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

サワグルミ生木から出ている高所の枯れ枝のスウィーピングなどにより採集できるものと考えられる。

8. 主な文献

- 江崎功二郎・井村正行(1999) トゲムネアラゲカミキリの生態に関する一知見. 甲虫ニュース, (125): 11
 草間慶一(1974) 天城山およびその近傍のカミキリ. 東海自然誌, (1): 23-59
 滑田保生(1987) 四国におけるトゲムネアラゲカミキリの追加記録. 月刊むし, (202): 2-3
 露木繁雄(2007) 山梨県でトゲムネアラゲカミキリを採集. 月刊むし, (440): 44

9. 標本

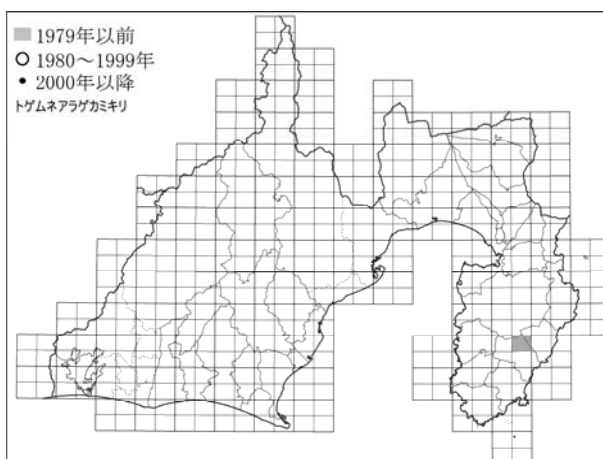
伊豆市湯ヶ島産: 神奈川県立生命の星・地球博物館(収蔵予定)

(多比良嘉晃)



©2019 M.Hasegawa

岐阜県高山市産 1998年 撮影: 長谷川道明



セラネクイハムシ *Donacia akiyamai* Komiya, 2001

(=2004年版のカワホネネクイハムシ)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abcd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 情報不足 (DD)]

1. 種の解説

体長 5.8~8.4 mm。体は黒色で背面は緑銅~青銅色の金属光沢を帯びる。腹面は銀白色の微毛を密生し光沢を欠く。触角各環節基半や肢は赤褐色。触角第3節は第2節より明らかに長い。上翅端は幅広く切断状。後肢腿節は肥大し下面端方に1鋭棘と2~3小歯を具える。雌雄とも腹部第1節(第3腹節腹板)に1対の小隆起を欠く。

成虫は6~10月頃に出現し、コウホネ類の葉上において葉を食害する。幼虫もコウホネ類の根を食べて成長する。

2. 分布

日本固有種で、三重県、兵庫県、広島県(基準産地)に分布する。県内では磐田市鶴ヶ池の記録がある。

3. 生息環境

コウホネ類(コウホネ、ヒメコウホネ、オグラコウホネなど)が生育する池沼に生息する。

4. 生息状況

県内では磐田市の1ヶ所の池にのみ生息しており、コウホネ葉上に見られる。生息地では個体数は少ない。県内ではコウホネ類が群生している池沼が少なく、かつ、十分な調査は行われていない。

5. 減少の主要因と脅威

県内の生息地では成虫・幼虫ともコウホネに依存しているため、植生の遷移などに伴ってコウホネがなくなると(54)、直ちに種の絶滅につながるおそれがある。

6. 保護対策

生息地の池は私有地で、許可なく採集することはできない。

7. 特記事項

静岡県レッドデータブック(2004)で掲載したカワホネネクイハムシ *Donacia (Donacia) ozensis* Nakane, 1954は、その種の解説で示唆したとおり、本種の誤同定であった。

8. 主な文献

乙部 宏(2006)三重県でセラネクイハムシを発見. 月刊むし, (430): 4-5

Komiya, Y. (2001) Description of a new *Donacia* species (Coleoptera, Chrysomelidae, Donaciinae) from west Japan. *Elytra, Tokyo*, 29: 41-44

林 成多(2005)日本産ネクイハムシ図鑑—全種の解説—. 月刊むし, (408): 2-18

林 成多・桂孝次郎(2001)兵庫県下でセラネクイハムシを発見. 月刊むし, (370): 3-4

平井克男(2014)セラネクイハムシの調査記録. 駿河の昆虫, (246): 6769

9. 標本

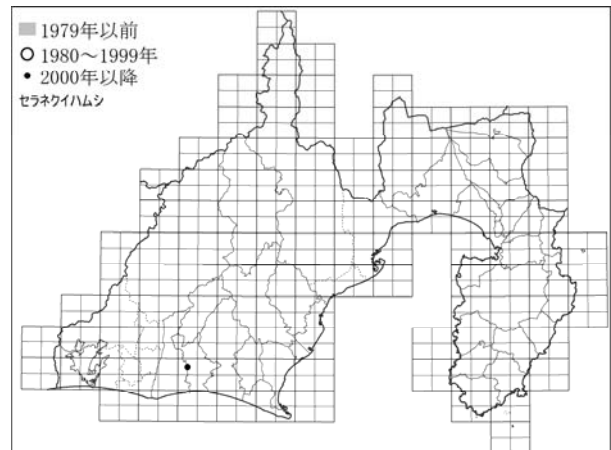
磐田市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

磐田市鶴ヶ池産 2000年7月10日 多比良嘉晃採集



ツヤネクイハムシ *Donacia (Donaciomima) nitidior* (Nakane, 1963)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 5.0~6.5 mm。体は黒色で表面は金銅色の光沢を有し、第 1 節をのぞく触角各環節の基部、肢の腿節基部及び脛・跗節などは赤褐色を呈する。前胸背板は粗い点刻を装い、一部皺状、翅鞘は明瞭な点刻列を具え、両側は多少とも横皺を装い、各翅端は少し斜めに裁断状を呈する。雌雄ともに腹部第 1 節 (第 3 腹節腹板) に 1 対の小隆起を欠く。

成虫は 3~5 月に出現し、スゲ類の花に集まり花粉などを食する。幼虫は水中 (土中) にあって同じくスゲ類の根を食害するものと思われる。

2. 分布

日本固有種で、本州に分布する。県内では浜松市浜北区根堅の記録があり、磐田市下野部、浜松市浜北区尾野・四大地、湖西市大知波などで採集例がある (未発表)。

3. 生息環境

スゲ類が生育する湿地や放棄水田に生息する。

4. 生息状況

県内では西部の湿地に生息しており、カサスゲやアゼスゲなどスゲ類の花や葉上に見られる。生息地での個体数は少なくないところもあった。

5. 減少の主要因と脅威

生息地の多くは放棄された水田や現在も使用している水田脇の小湿地などであり、このような湿地は開発 (15-1) や土地の改変 (23) などによって失われるおそれが大きい。実際に、磐田市下野部の個体数が多かった生息地は埋め立てられてしまった。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

体色が青藍色を呈する個体もいる。

8. 主な文献

長谷川道明・吉富博之 (1998) 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48

高橋和弘 (1988) ネクイハムシ類 1987 年の採集記録. *Donaciist*, (2): 22

野尻湖昆虫研究グループ (1985) アトラス・日本のネクイハムシ-化石同定の手引き. 同グループ, 大阪, 182 pp.

林 成多 (2005) 日本産ネクイハムシ図鑑-全種の解説-. 月刊むし, (408): 2-18

9. 標本

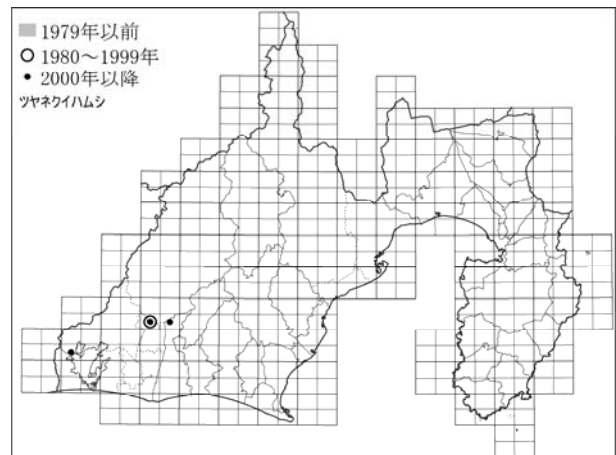
浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

湖西市大知波産 2000年4月17日 多比良嘉晃採集



キヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris (Euplateumaris) sericea* (Linnaeus, 1768)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-bd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 6.5~8.8 mm。黒色で表面は銅・青藍・銅赤色などの金属光沢を有する。前胸背板は横皺を密に装い、明瞭な点刻を欠き、上翅は粗大点刻列を具える。上翅会合部間室が反転することでネクイハムシ属 *Donacia* と区別される。

成虫は4~5月に出現し、スゲ類の花に集まり花粉などを食するほか、スゲ類の開花期でないときには他の花にも集まる。幼虫は水中(土中)にあって同じくスゲ類の根を食害するものと思われる。新成虫は秋に出現して、晩秋の11月にも姿が見られる。

2. 分布

国外では朝鮮半島、サハリン、シベリア、中央アジア、ヨーロッパに広く、国内では北海道、国後島、択捉島、本州、佐渡島、九州に分布する。県内では賀茂郡東伊豆町稲取、富士宮市猪之頭田貫湖・小田貫湿原の記録があり、他に伊豆市上白岩・日向・持越、沼津市西浦足保、静岡市葵区田代木賊で採集例がある(未発表)。

3. 生息環境

スゲ類が生育する湿地や川沿いの林間などに生息する。

4. 生息状況

県内では伊豆と東部から点々と採集例があり、飛び離れて大井川上流部で生息が確認された。一部の生息地では個体数は少なくない。

5. 減少の主要因と脅威

道路脇などに位置する小規模な生息地では、周辺環境の悪化や開発行為など(23)によって生息地が失われる可能性がある。

6. 保護対策

一部の生息地は県の天然記念物に指定されるなどして保全されている。

7. 特記事項

広い分布域をもつ種であるが、現在までのところ西部での採集例はない。

8. 主な文献

長谷川道明・吉富博之(1998) 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48

林 成多(2005) 日本産ネクイハムシ図鑑—全種の解説—. 月刊むし, (408): 2-18

松原 豊(1989) 1988年関東地方で採集したネクイハムシ類. *Donaciist*, (3): 9-10

多比良嘉晃・松本雅道(1993) 小田貫湿原で採集した甲虫類. 静岡の甲虫, 10(2): 25-27

高桑正敏・高橋和弘(1987) ネクイハムシ類 1986年の採集、観察記録. *Donaciist*, (1): 24-26

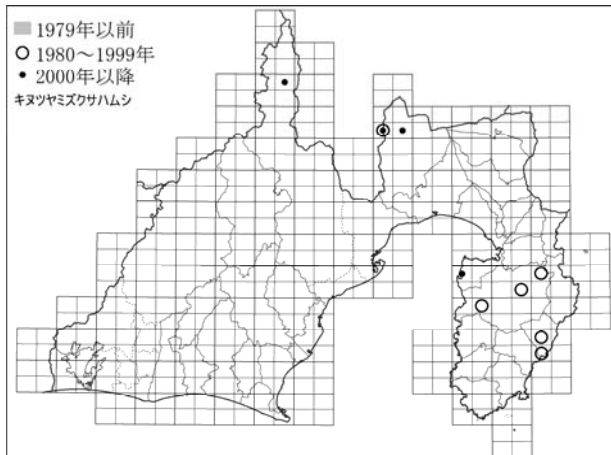
9. 標本

伊豆市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



伊豆市産 1996年5月15日 石川 均採集



ババスゲヒメゾウムシ *Limnobaris babai* Chūjo & Morimoto, 1959

ゾウムシ科 Curculionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-bd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 3.8~4.2 mm。黒色で強い光沢を有し、背面に白色鱗片を散生する。体はおおむね長楕円形、口吻は細長く少し湾曲する。翅鞘は点刻を含む10条の縦条溝を具える。オスの前肢脛節内縁は中央前で鋭く三角形に突出する。

成虫は4~5月に出現、スゲ類のスウィーピングによって採集される。成虫・幼虫ともにスゲ類の茎葉を食害する。

2. 分布

日本固有種で、本州と九州に局地的に分布する。県内では賀茂郡東伊豆町入谷で記録があり、他に賀茂郡東伊豆町白田、駿東郡小山町竹之下、富士宮市猪之頭、浜松市浜北区尾野、浜松市北区引佐町で採集例がある(未発表)。

3. 生息環境

平地から丘陵地のスゲ類が生育する湿地に生息する。

4. 生息状況

県内では東部と西部で採集例があるが、いずれの生息地も生息密度は低い。

5. 減少の主要因と脅威

生息地及び生息地周辺の開発や改変(23)、植生遷移の進行(54)、湿地の乾燥化(54)などによって生息環境が失われるおそれがある。なお、浜松市北区引佐町の生息地は大規模道路工事(24)によって破壊された。

6. 保護対策

東伊豆町の生息地の一つは静岡県の天然記念物に指定されており、他に二つの生息地も自然公園内にあって一応保全が図られている。

7. 特記事項

本種と同様の環境に生息する近縁種にスゲヒメゾウムシ *Limnobaris albosparsa* Reitter, 1910 とスゲノハラジロヒメゾウムシ *Limnobaris japonica* Yoshihara & Morimoto, 1994 が知られているが、今のところ県内における両種の生息は確認されていない。

8. 主な文献

高桑正敏・高橋和弘(1986) ババスゲヒメゾウムシの伊豆と神奈川県下の記録. 甲虫ニュース, (74): 7
Yoshihara, K. (2016) The Insects of Japan, Vol. 6. Coleoptera, Curculionidae, Baridinae. Touka Shobo Co. Ltd., Fukuoka, 171 pp.

9. 標本

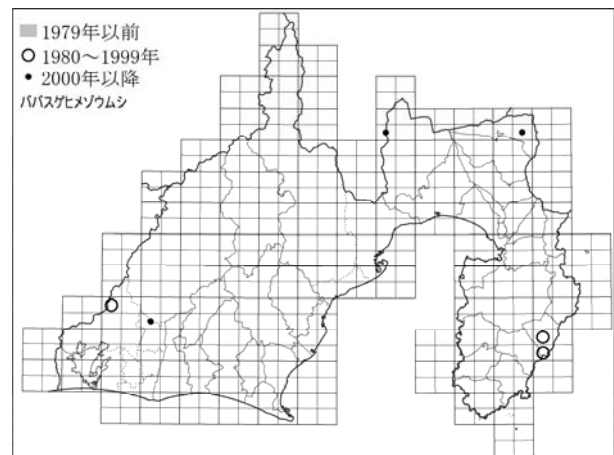
東伊豆町産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

東伊豆町白田産 1998年5月20日 多比良嘉晃採集



タカネキマダラセセリ

Carterocephalus palaemon akaishianus Fujioka, 1970

セセリチョウ科 Hesperiidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abcd) 変更コード 4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR)]

1. 種の解説

開張およそ 30 mm。翅の表は黒褐色の地に黄褐色の紋が並び、裏面は明るく後翅の黄色い紋が目立つ。幼虫の食餌植物はノガリヤス類 (イネ科)。幼虫で越冬。県内における幼生期の観察例はない。北アルプスでは個体数が多く、年 1 回、6 月末～7 月上旬にかけて羽化する。各種草本の花に集まり、飛翔は素早い。

2. 分布

種 *palaemon* は、国外ではヨーロッパからシベリア北部にかけてのユーラシア大陸及び北米北部に分布し、国内では北アルプスと南アルプスに局地的に分布している。県内では南アルプスに分布する。静岡県産は南アルプス固有の亜種である。

3. 生息環境

県内で採集された個体の生息地は標高およそ 2,600 m で、大井川最上流部の源頭に生じたノガリヤス類と蜜源となる花が豊富な明るい草付である。

4. 生息状況

県内では 2002 年 7 月 20 日、大井川上流三国沢の 1♂ が唯一の記録である。

5. 減少の主要因と脅威

一度記録されただけなので、減少・脅威を検討する情報はない (99)。

6. 保護対策

南アルプス亜種は、2018 年 2 月 15 日に国内希少野生動植物種に追加指定され、捕獲・採取、譲渡などが原則禁止された。

7. 特記事項

本種の習性や生息地の状況からみて土着している可能性が高い。今後十分な調査が必要である。

8. 主な文献

岩阪佳和 (2002) 南アルプス (赤石山脈) 大井川最上流部 (静岡県側) でタカネキマダラセセリを採集。房総の昆虫, (28) : 7

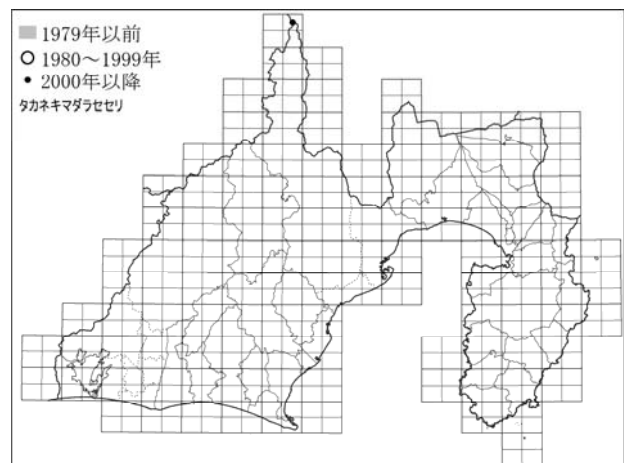
9. 標本

静岡市産：個人所蔵 (公的機関所蔵なし)

(白井和伸・諏訪哲夫)



山梨県産♀表面 1982年7月2日 諏訪哲夫採集



ウミコオロギ (大崩海岸の個体群) *Caconemobius sazanami* (Furukawa, 1970)

(=ナギサズ)

コオロギ科 Gryllidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長オス 8.0~11.5 mm、メス 9.0~13.5 mm。体色は黒~黒褐色で、体背面には斑紋はない。生時は腹面が普通黄緑色だが、死後黄変する。成虫でも翅はなく、細長い脚で岩上を素早く歩き回る。似た種にウスモンウミコオロギ *C. niisatoi* Ishikawa, 2017 があるが、より脚が長く体背面に淡色斑紋をもつことで区別できる。年 1 化で、成虫は 8 月中旬に出現するようになり、12 月上旬まで見られる。

2. 分布

国外では韓国に、国内では北海道(含、国後島)、本州、佐渡島、伊豆諸島、対馬、奄美大島に分布する。県内では伊豆半島に広く分布しているが、それ以外では静岡市と焼津市にまたがる大崩海岸で生息が確認されているだけである。

3. 生息環境

玉石を敷き詰めた海浜に生息し、県内では海に迫った岩崖地とセットになった海岸に生息する。また、そのような場所ではテトラポッドが設置されても生息可能である。しかし、コンクリート護岸となった場所からは姿を消している。

4. 生息状況

大崩海岸においては、生息密度は 2004 年当時に比べ大分低くなっている。

5. 減少の主要因と脅威

海岸整備によってコンクリート化したところではほとんど見ることができず(14)、また海浜が波にさらわれ縮小して生息地が狭まっている(55)。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

大崩海岸の生息地は、西は三重県、東は伊豆半島まで分布の空白があり孤立している。

コオロギ科を細分して、本種はヒバリモドキ科 Trigonidiidae とされることがある。

8. 主な文献

石川 均 (1986) ウミコオロギの体長についての検討. バッタリギス, (67): 2235-2236

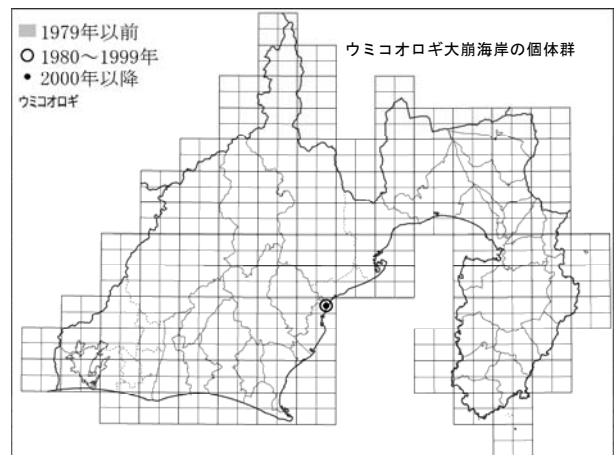
石川 均 (1998) ウミコオロギに関する知見. バッタリギス, (114): 55-58

9. 標本

焼津市小浜産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 H. Ishikawa
静岡市駿河区石部 2014年10月24日 石川 均



(石川 均)

1. 種の解説

体長オスメスともに 32~38 mm 程度。オスは明るいルリ色の体色、メスは青~緑色の体色に黒斑をもつ中型のイトトンボである。寒冷地の池沼や湖に生息する北方系の種で、成虫は 6~9 月に出現する。未成熟な個体は水辺を離れて付近の林野へ移動して生活し、成熟すると再び水辺に戻って生殖行動を行う。

2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシアに、国内では北海道と岐阜県、福井県以北の本州に分布している。北海道では平地の池沼や湖に広く見られるが、本州の生息地はほとんどが山岳地帯に限られる。県内の記録は伊豆市湯ヶ島の天城山の八丁池における 1 例だけである。

3. 生息環境

北海道や本州の山岳地帯の生息地は水生植物が繁茂している池沼や湖であり、冷涼な気象条件のもとにある池沼でなければ生息しないと考えられる。

4. 生息状況

80 年以上前の 1930 年の記録以外に確認された例はなく、その後にも現地での調査が試みられたことが何度もあるが発見されていない。周辺部にも生息に適した環境の池沼がないため、県内には現存する生息地はないと考えられる。

5. 減少の主要因と脅威

本県には山岳地帯には池沼や湖がほとんどなく、もともと本種の生息に適した環境は少なかった。記録された池沼は、昔は現在よりも水生植物が豊富であったという話もあるので、本種が生息できる環境があった可能性は残る (54)。

6. 保護対策

記録地にも現存せず、近隣にも生息地がなく移動性も弱い種であるため、本種に関して有効な保護対策は立てられない。

7. 特記事項

文献上に記録があり、過去には生息する環境があった可能性があるものの、現在の国内の分布では隔絶された地点での記録であるため要注目種とする。

8. 主な文献

朝比奈正二郎 (1956) 日本の蜻蛉(3). 新昆虫, 9(6): 47-51

福井順治・加須屋 真 (1998) 朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録. 駿河の昆虫, (182): 5091-5110

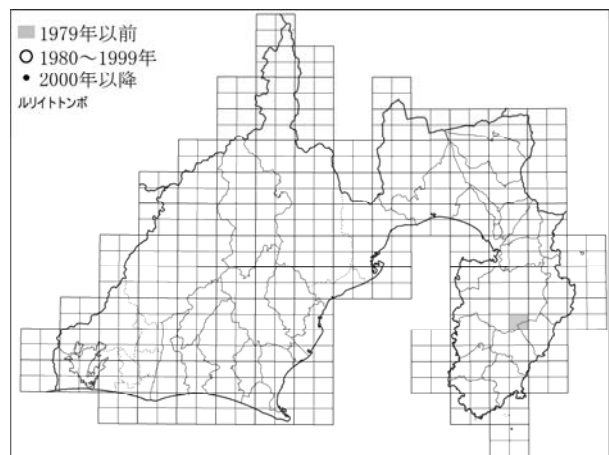
9. 標本

天城山八丁池産 : 国立科学博物館所蔵 (朝比奈正二郎コレクション)

(福井順治)



長野県 2002年7月31日 加須屋 真



オオトラフトンボ *Epitheca bimaculata sibirica* Selys, 1887

エゾトンボ科 Corduliidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) 変更コード5

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長オスメスともに 55~60 mm 程度。オスメスともに橙褐色と黒色の虎斑（とらふ）模様をした中型のトンボである。寒冷地の湿原や水生植物が繁茂したやや大きめの池沼や湖を主な生息地としている。県内では観察例がないが、成熟したオスが開放的な水面上をホバリングを交えて縄張り飛翔をする姿を見ることが多い。6~7月頃に出現する初夏のトンボである。

2. 分布

国外では中国、ロシアからヨーロッパまでユーラシア大陸に広く、国内では北海道と本州に分布し、本州では中部地方以北の寒冷地や山岳地域に見られ、産地はきわめて限定されている。県内では富士山頂における1例だけが確実な記録である。

3. 生息環境

本州の中部山岳地域の場合には、開放的で冷涼な大きめの池沼や湖が生息地となっている。水生植物が豊富な水質のよい池沼が好まれる。

4. 生息状況

40年以上前の1971年に、富士山頂の山梨県との県境付近にて採集された1オス以外には確認された例はなく、この個体は近隣からの移動個体であると考えられる。県内には定着している池沼は見つかっていないが、隣接した山梨県の富士五湖には分布している。

5. 減少の主要因と脅威

北方系の種であるため、温暖な本県には本種の生息に適した環境はもともと少なく、確実に生息している産地も見つかっていない。本種の生息の可能性が残る、標高の高いところにある湖沼や湿原の池塘の環境を残しておく必要がある(12)。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

環境省 編(2015)の改訂版レッドデータブックには掲載されていないが、近隣を含めて東北日本では県版レッドリストに入っているところが多い。

8. 主な文献

朝比奈正二郎(1973) 1971年度に富士山頂で得られた昆虫類について. 富士山西斜面学術調査報告書. 建設省中部地方建設局富士砂防工事事務所.

福井順治・加須屋 真(1998) 朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録. 駿河の昆虫, (182): 5091-5110

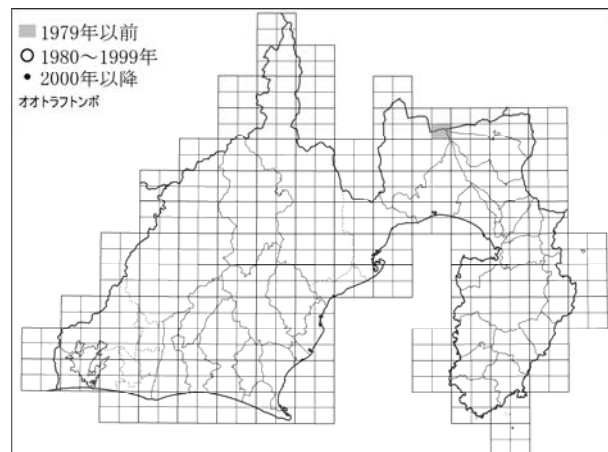
9. 標本

富士山頂産: 国立科学博物館所蔵(朝比奈正二郎コレクション)

(福井順治)



富士山頂産 1971年7月12日 板倉 博採集



1. 種の解説

体長オスメスともに33~40mm程度。オスメスともに成熟すると体色が黒化する小型のアカトンボの一種である。丘陵地に生息し、成虫は7~11月にかけて出現する。成虫は生息地をあまり離れずに生活し、成熟したオスは水辺で縄張りをもち、メスを見つけると交尾・産卵に至る。産卵は上空から卵をばらまく「打空産卵」である。

2. 分布

日本固有種で、本州の東北地方から中国地方までの約半数の県に分布するが、産地は極限される傾向がある。近隣の愛知、三重、岐阜の各県にはわずかに現存産地があるが、全国的には急速に減少している。県内では浜松市に記録がある。

3. 生息環境

西南日本では丘陵地のマツ林に囲まれたやや浅く、植生が豊かで岸辺に背丈の低い水生植物がある、水質がよい古いため池が典型的な生息環境である。東北日本の生息地はミズゴケ湿原である。これまでの調査では県内には適した生息環境と判断できる池沼は見つからない。

4. 生息状況

愛知県では産地があるが、県内で確認されたものは2000年11月4日に浜松市で採集された1オスだけである。記録地は長年の調査がされてきた場所であることと、本種の定着する環境とは条件が異なるため、移動個体が記録されたものと考えられている。

5. 減少の主要因と脅威

県内にはミズゴケ湿原はほとんどなく、丘陵地にも植生に恵まれた浅いため池も乏しいために、もともと本種の生息に適した環境は少なかった。ため池の管理放棄(53)による過剰な植生の繁茂や、わずかに残っていた湿地も乾燥化が進んで(54)、本種の生息できる環境はさらに消失する傾向にある。

6. 保護対策

飛来による記録と考えられ、生息地が把握しにくいことから有効な保護対策は立てられていない。

7. 特記事項

記録地は本種の生息する環境とは異なるが、あまり移動性が強い種ではないことを考慮すると、近隣の小規模なため池には生息の可能性は皆無とはいえない。急激に産地が消滅している種で環境省編(2015)の改訂版レッドデータブックだけでなく、近隣を含めて県版レッドリストにあげている県が多い。

8. 主な文献

荻部治紀(2000) マダラナニワトンボの生息現状. TOMBO, (42): 26-30

二橋 亮(2001) 静岡県におけるマダラナニワトンボの記録. TOMBO, (43): 38-39

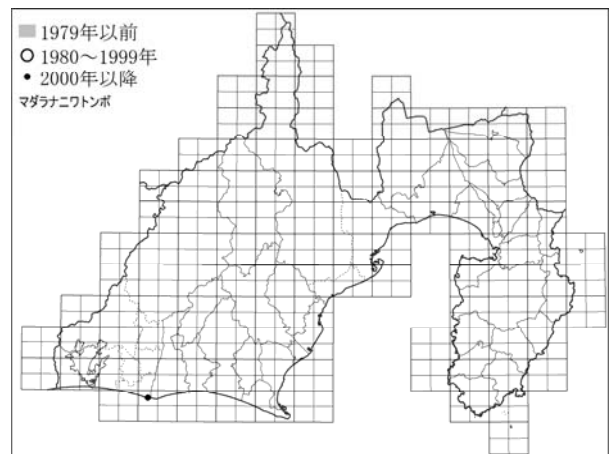
9. 標本

浜松市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 R.Futahashi

浜松市産 2000年11月4日 二橋 亮採集



(福井順治)

クギヌキハサミムシ *Forficula scudderii* Bormans, 1880

クギヌキハサミムシ科 Forficulidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) 変更コード 1, 5

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長オス 23.5 mm。3 齢幼虫で越冬し、4 齢を経て 6 月頃成虫となり夏に繁殖する年 1 化型である。やや大型のハサミムシで、オス尾端のはさみは大きく、釘抜き、あるいは栓抜きのように種を誤ることはない。後翅は退化しているため飛ぶことはできないが、灯火に集まることが知られている。

2. 分布

国外ではサハリン、朝鮮半島、シベリア東部、中国に、国内では北海道、本州、九州に分布する。本州における分布の西限は長野県伊那、南限は静岡県である。九州からは大分県の記録がある。県内における記録はほとんどなく、富士山麓で確認されているほか、菊川で採集されたという情報(真偽不明)しかない。

3. 生息環境

一般に山地性とされ、落葉広葉樹上に生息すると考えられている。一方、平野部の河川沿いで、ヨシ原が見られるような場所で採集された例もいくつかあり、詳しいことはまだわかっていない。県内では富士山麓の落葉広葉樹林の林縁で確認されているほか、菊川の採集例は低湿地部と思われる。

4. 生息状況

十分な情報がえられていないためよくわからないが、生息密度はかなり低いものと思われる。北方系の種で、北海道ではふつうに見られる。県内の生息地での詳細な調査が望まれる。県内では 1985 年に採集されているが、その後確認されていない。

5. 減少の主要因と脅威

減少の程度は不明であるが、生息地での開発(11、16)は本種の存続にとって脅威といえる。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

富士山周辺の草原や、河川河口部のヨシ原で本種を対象とした詳細な調査が望まれる。

8. 主な文献

石川 均(1999) クギヌキハサミムシの生息環境について. バッタリギス, (120): 46

河野勝行(1998) クギヌキハサミムシの分布と棲息環境について. バッタリギス, (119): 9-10

日本直翅類学会 編(2016) 日本産直翅類標準図鑑. 株式会社学研プラス, 東京, 384 pp.

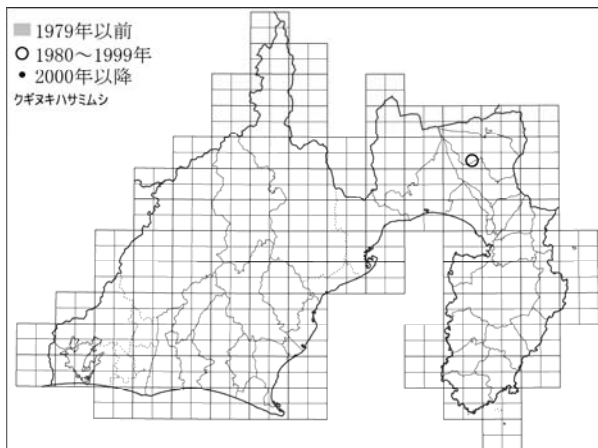
9. 標本

裾野市須山産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

裾野市須山産 1985年7月17日 石川 均採集



(石川 均)

イトアメンボ *Hydrometra albolineata* (Scott, 1874)

イトアメンボ科 Hydrometridae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU)]

1. 種の解説

体長 11.2~14.0 mm。暗褐~灰黒色で肢は多少とも淡色。体は細い棒状で、頭部前端は膨大し、複眼は頭部両側の前端から 2/3 よりやや後方に位置し、小さく半球形に突出する。半翅鞘は長翅型と微翅型の 2 型がある。肢ははなはだ細い。オス第 7 腹節腹面は棘状突起を欠き、長毛を密生する。

成虫は水面で活動し、水面に落ちた小昆虫などを捕食する。成虫で集団で越冬する。

2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に、国内では本州、四国、九州、対馬、トカラ列島(中之島・宝島)、奄美大島に分布する。県内では伊豆半島、静岡市葵区鯨ヶ池、磐田市桶ヶ谷沼の記録があるが、少なくとも後 2 者の記録は近縁種の誤同定である可能性がある。

3. 生息環境

池沼、水田、河川などの水面に生息し、水辺の草間などに見られる。

4. 生息状況

かつては全国的にふつうに見られたといわれるが、1960 年代以降各地で激減している。県内ではデータを伴った記録はなく、生息状況は不明である。県内各所の水域を調査したが、ヒメイトアメンボ *Hydrometra procera* (Horváth, 1905) とオキナワイトアメンボ *Hydrometra okinawana* Drake, 1951 は多数確認されたものの、本種の生息を確認することはできなかった。

5. 減少の主要因と脅威

開発(23)や圃場整備(15-2)などによる生息環境の消失、農薬・肥料などによる水質汚染(32)などが脅威となる。

6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

7. 特記事項

神奈川県では丘陵地に接した河川後背湿地の水生昆虫や水田雑草が豊富な水田に生息するといいい、県内でもそのような条件の場所を調査することによって、生息地が発見される可能性がある。

8. 主な文献

安立綱光(1951)伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島(伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

佐藤卓也(1988)静岡県中西部のタイコウチ, コオイムシ, およびヒメミズカマキリについて. 駿河の昆虫, (143): 4116-4122

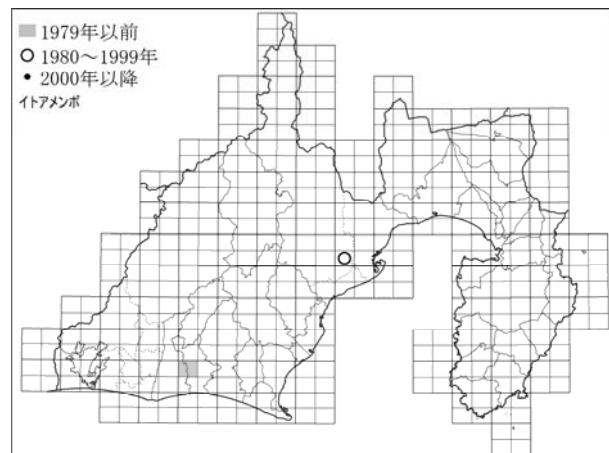
杉山恵一 編(1990)桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査-. (財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

9. 標本

なし。



神奈川県愛川町 2017年7月29日 北野 忠



(多比良嘉晃)